sawako : Sounds

In memoriam Sawako Kato (1978-2024)
Text by Kenneth Kirschner

2003 年、友人の Taylor Deupree が、彼が 12k のためにまとめている新しいコンピレーションに参加しないかと誘ってくれました。そのとき、私は参加者全員にサウンド ファイルを 1 つか 2 つ送ってもらうという、おそらくはあまりにも巧妙すぎるアイデアを思いつきました。レコードに収録されているさまざまなアーティストのサウンドだけでトラックを作ろうという意図でした。これがアルバム Two Point Two の「June 8, 2003」という曲になりましたが、結局、私にとってはそれがプロジェクトの最も重要な部分からは程遠いものでした。

リクエストを送信して間もなく、日本から不思議な小包が郵便で届きました。中には金色の CD-R が 1 枚入っていましたが、ディスクの前面にフェルトペンで小さくてきれいな字で 3 つの単語が書かれていただけで、それ以外は何もメモや説明はありませんでした。

sawako
sounds
2003

コンピレーションに使える短いサウンド ファイルを 1 つか 2 つ聞けるだろうと思って再生ボタンを押すと、別の世界に連れて行かれました。

私は何を聞いていたのだろう。おもちゃ、鳥、電車。昆虫、発振器、子供の声。突然の耳障りなノイズの爆発と圧倒的な静寂の通路。交通。オルゴール。知覚のぎりぎりで遠くから演奏される楽器、そして人々が何気なく大声で話す声。カラスの鳴き声。そしてそのすべてに、詩と魔法が聞こえた。

これは一体何だったのだろう？アルバムだったのだろうか？ランダムな音の集まりだったのだろうか？彼女が私のために作ったのだろうか、それとも彼女が残していたガラクタだったのだろうか？それが何であれ、それは私が今まで聞いたことのないようなものだった。

18 の短いトラックがあり、すべてタイトルも説明もなく、合わせて 30 分ほどの音楽を構成していました。サウンドはばらばらで、断片的で、つながりがありませんでした。それらは、一見ランダムに、特に順序もなく、あるいはおそらく最も慎重な選択と思考によって組み合わされていました。それは物語であり、ナラティブでしたが、一見すると恣意的で、純粋な偶然の産物のようでした。すべてのサウンドが完璧で、まさに必要なものであり、必要な場所でしたが、意図的に配置されたようには見えませんでした。そこには、単一の圧倒的な芸術的ビジョンが働いているようでしたが、これらの質素な素材が本質的にランダムにまとめられたという避けられない感覚もありました。それはパラドックスであり、ミステリーであり、贈り物でした。

どこからともなく現れたこの神秘的で魅惑的な物体に魅了され、私は人々にそれを聞かせ始めました。私は「これが何なのかは分かりませんが、聞いてみてください！」と言いました。私たちはそれを地下出版のように、秘密の地下雑誌や違法な海賊版のように回し始めました。それが何であれ、それはアルバムのように感じられました。完全な声明、完全な宇宙のようでした。

しかし、それはアルバムだったのだろうか？それとも、無秩序に寄せ集められた音の集まりだったのだ

ろうか？その後の数年間、私はこれらの質問やそれ以上の質問を、音の謎めいた作者に投げかけたに違いない。そして、矛盾した質問のそれぞれに対して、彼女は間違いなく「ハハハ、そうそうそう！」と微笑みながらうなずき、何も明かさずに答えた。

sawako が亡くなる直前に彼女から連絡があったので、彼女を失ったという知らせは私にとってはショックではなく、むしろ悲痛なものでした。私はすぐに、彼女の作品の唯一無二で奥深い本質を人々に伝える方法、それにどう応えるかを模索し始めました。そして、どこからともなく郵便で届いたあの金色の CD を思い出しました。ディスクは確かになくなっていました。古いスタジオを破壊した火事で失われたか、放置された倉庫の混乱の中で埃っぽい箱の底に埋もれているかのどちらかです。

しかし、だんだんと、そのコンピレーション トラックを作るには、オーディオをコンピューターに転送しておかなければならないことに気付きました。古いハード ドライブをどんどん掘り起こし、ついにオリジナルのサウンド ファイルを発掘しました。ファイルは古すぎてコンピューターのオペレーティング システムでは読み取れず、混沌としたコードのような意味不明なテキスト ファイル、つまりデジタル雑音として解釈されていました。(テイラーのこのリリースのアートは、それらの読み取れないファイルの ASCII ノイズから作成されています。) このかけがえのない作品は、世界中のどこにも私のハード ドライブ以外には存在しないという恐ろしい事実を確信し、私はパニックに陥りました。しかし、少し説得すると、すぐにファイルを再生可能な状態に復元できました。そして、すぐにテイラーにメールを送り、1 つの考えを伝えました。「これはみんなに聞いてもらいたい」。

そこで私たちは、20 年以上前に彼女が私に聴かせてくれたのとまったく同じ音楽を皆さんにお届けします。18 曲の短いトラックが、古いゴールド CD に収録されていたのとまったく同じレイアウトで、説明も詳細化もされず、そのままの姿で存在する理由も一切ありません。つまり、音なのです。

おそらく、どこからともなく現れたあの不思議な音のコレクションの予期せぬ、そして自業自得の魔法を、他の人に再現することは不可能だろう。しかし、数十年後に再び聴いてみて、これが今までで一番好きな sawako のアルバムだという確信が強まった。それは、おそらくアルバムではなかったからだろう。そして、それは sawako にとって完全に理にかなったことだったはずだ。

sawako の作品は、偶然と計画、無作為と選択、意図と偶然の狭間で、危うく対立する関係にあった。彼女は完璧で、独特で、優しいタッチを持っていた。秩序と混沌のちょうど境界にある、平和で、一見不可能に思える均衡。私は彼女の作品を説明するのに、いつも「詩」や「魔法」といった言葉を探したが、彼女がいとも簡単に成し遂げたことに対して、それらの言葉は不十分であることが常に証明されていた。彼女のあらゆる所作には自然さがあり、彼女を取り巻く世界に対する徹底的な開放性があった。単純なものと複雑なもの、恣意的なものと選択されたもの、無作為なものと計画されたものに対する、生来の直感的な把握力は、ほとんどのアーティストにはない。しかし、彼女はそれを持っていた。完璧に、心地よく、静かに。彼女は、私が知る限り「天才」という言葉を使うことを一瞬たりともためらわなかった唯一の人だった。

彼女の作品を他の人に説明しようとするとき、私はいつもニューヨーク時代の話を引き合いに出す。彼女はイーストビレッジの古いコミュニティガーデンのひとつで野外コンサートをしていた。交通、騒音、会話、街の終わりのない音の混沌の中。そして一瞬たりとも場違いな音はひとつもなかった。車のクラクション、不快な通行人の騒々しい会話、頭上を飛ぶ飛行機、まるで彼女がそれらをすべてコントロールしているかのようだった。まるで街の音風景に散らばった断片が彼女自身の楽器であり、それぞれがシームレスで完璧で意図的な彼女の展開する作品の一部であるかのようだった。sawako には内も外もなく、自然も人工もなく、音楽も非音楽もなかった。あるのは世界だけ。彼女の小さな宇宙。

彼女の音楽を構成する短くてノイズの多い録音のように、さらにいくつかの小さな断片を追加してみま

しょう。
◆ sawako がニューヨークに来た時、私は彼女の英語教師になりましたが、その仕事は完全に失敗しました。（公平に言えば、彼女が私に日本語を教えようとしていたら、私はもっとひどい結果になっていたと思います。）それでも、私たちはいつも意思疎通を図ることができました。
◆ コンサートのリハーサルの準備をしているとき、私は机の下に潜り込んで機材をミキサーに接続しました。私は彼女に向かって「OK、最初のケーブルを渡して！」と叫びました。彼女は私にケーブルを渡しました。次に私は「OK、2 番目のケーブルを渡して！」と叫びました。すると彼女は笑って「いやいやいや！」と言いました。私はびっくりしました。彼女はモノラルで演奏していたのです。それが、いつか彼女の作品を理解できるかもしれないと思った最初の瞬間でした。
◆ sawako は、Macintosh オペレーティング システムの各バージョンには独自のサウンドがあると強く信じていました。System 7 が彼女のお気に入りだったように思います。
◆ 彼女のショーの録音を担当させられた私は、始まるや否やすっかり魅了されてしまいました。コンサートは果てしなく続き、果てしなく永遠でありながらも完全に夢中になり、決して終わらないかのようでした。録音を止めたとき、たった 17 分しか経過していないことに驚きました。
◆ 彼女は私を説得して、ニューヨーク市の通りを走るリムジンの中で一緒にコンサートをやろうと誘いました。理由はわかりません。
◆ リスボンの街を歩いていると、sawako は遅れてしまいました。sawako が私たちに追いつこうと急いでいると、テイラーは振り返って、階段を駆け上がるサワコの写真を撮りました。それは私たちのお気に入りの写真になりました。sawako は、魅力的なスパイ、秘密諜報員、大作アクション映画のスターのように見えました。sawako はいつもその写真を嫌っていました。もちろん、サワコは自分が魅力的なスパイや有名な映画スターだとは思っていなかったからです。でも私たちにとって、sawako はいつもアクションヒーローでした。
◆ 彼女はかつて東京で行ったコンサートで、何の前触れもなく、何の説明もなく、30 分間の完全な沈黙で始まったことを話してくれた。彼女は、それはこの世で最も自然なことであり、誰もそれについて深く考えなかったと語った。
◆ 私が町を離れると聞いて、sawako はマンハッタンの北端にある私の古いアパートの鍵をくれと頼んできました。彼女の計画は、新しいアルバムのために私のピアノを録音しに行くことだったのですが、結局は私の猫の録音をすることになりました（猫は後にレコードにクレジットされました）。しばらくして、彼女はメールで私のアパートの部屋の音を録音してほしいと頼んできました。そうすればアルバムを完成させることができる、と彼女は言いました。私はフィールドレコーダーをセットし、その前に座りました。静かに、まったく動かずに。それは、私たちを取り囲む沈黙（でも沈黙ではない）を録音しました。建物の低い響き、通りの遠くのささやき。私は録音したものを彼女に送りました。彼女はすぐに返事をくれて、アルバムを「ルームトーン」と呼ぶことに決めたと言いました。しかし、その名前がすでに使われていることを知ると、彼女は新しい名前を思いつきました。「Hum」。

sawako のいない世界は、もっと静かな場所になるでしょう。そして、それは彼女が決して反対しなかったことです。彼女は静寂の王女であり、「小さな小さな」女王であり、沈黙の魔女でした。彼女は、私たちが一生かけて学び、再学習する教訓を、もう一度私に教えてくれました。それは、沈黙がなければ音はなく、音がなければ沈黙はないということです。だから、彼女の音を忘れずに、そして彼女の沈黙を忘れずにいましょう。しかし、何よりも、彼女のことを忘れずにいましょう。

Kenneth Kirschner
New York City
2024 年 4 月